子育て家庭の生活に対する満足感

―家族関係・身近な人間関係からの分析―

二方　龍紀

Life Satisfaction of child-rearing Family : From Survey of Family and Close relationships

Riki FUTAKATA

本稿の目的は、「子育て家庭」の生活に対する満足感に関わる要因について、諸属性や家族関係・身近な人間関係等の側面から分析を行うことである。経済的要因が生活満足感に与える影響が大きいことが確認できた（子育て家庭の男性に関しては、特に、その傾向が顕著だった）。また、相談相手がいることや子育てに関係する人間関係があることが、生活満足感に対して、正の効果があることが確認できた。

キーワード：「子育て家庭」「生活満足感」「家族関係」「友人関係」

１．はじめに

子育て家庭の支援をめぐっては、感染症の蔓延、生活の格差の拡大という不安定な社会状況の中で、改めて、その重要性が再確認された。政府は、子育て支援を含めた、子どもと関わる政策を集約し推進するための新たな行政機関の設立に向けて、動き出すことになった。子育て家庭の支援は、まさに、社会全体で取り組むべき課題になっている。

これまでに、子育て家庭の支援について検討するために、「生活時間・生活意識」「家族意識・行動」「社会意識」「人間関係」「働き方」などの側面から分析を進めてきた（二方 2014・2015・2016・2017・2018・2019・2020）。また、特に、「子育て家庭の経済状況」に着目した分析を進めるために、「暮らし向き」からの「生活意識」「社会意識」の分析も進めた（二方 2021）。

本稿では、こうした分析をふまえて、子育て家庭の支援の方向性を検討するために、子育て家庭の生活に対する意識、特に、「生活満足感」と関わる要因の分析を進める＊1。その際には、それぞれの要因間の関係を整理するために、生活満足感を従属変数、年齢・収入、家族関係、身近な人間関係などを独立変数とした二項ロジスティック回帰分析を行う。こうした分析を通じて、子育て家庭にとって、「生活満足感」を高める要因を確認し、支援の方向性を明らかにしたい。

２．これまでの研究との関わり

先に触れたように、本稿は、今までの研究における「子育て家庭の生活と支援」に関する問題関心と関わっている。その中でも、特に、本稿の分析は、「家族や身近な人間関係によるサポート」の研究と関連している（二方 2018）＊2。この研究では、主に、以下のような分析を進めた。

①親同居と生活意識（親と同居する子育て家庭の生活満足感や暮らし向き）
・親と同居していない回答者の方が、「生活に満足している」「暮らし向きに余裕がある」とする割合が高い。

②友人による相談サポートと生活・社会意識（悩みごとの相談相手の有無と生活・社会意識の関わり）
・「相談相手有」とする回答者の方が、「家庭生活重視」「福祉社会志向」の割合が高い。
・「相談相手有」とする女性では、「将来は明るい」とする割合が高い。「相談相手有」とする男性では、「自分の生活重視志向」の割合が低い。

③子どもを介した人間関係と生活・社会意識（子どもを介した人間関係の有無と生活・社会意識の関わり）
・「子どもを介した付き合い有」とする回答者の方が、「家庭生活重視」「福祉社会志向」の割合が高い。

④友人関係の広がりと生活意識の関わり（友人数と生活満足感の関わり）
・「友人数多数」の男性の方が、生活に対して、「満足」と答える割合が高い。

こうした分析結果をふまえて、「子育て家庭」には、「子育てを中心としたコミュニティでのライフスタイル志向」が見られ、また、その背景にある社会問題として、「子育て家庭の孤立」があることを指摘した（二方 2018：51）。

本稿では、「子育て家庭の支援」を考えるうえで、「生活満足感」を高める要因を確認することが重要であると考え、その要因を「家族関係」「身近な人間関係」「生活意識・自己意識」という側面から探り、それぞれの要因間の関係を整理するという視点で分析を進める。

３．生活満足感の分析

３－１　全体の傾向

ここでは、①基礎的な要因（年齢、世帯年収、共働きかどうか、末子年齢）、②自身の両親との関係（同居しているかどうか、関係に満足しているかどうか、自身の両親・義理の両親との経済的関係があるかどうか）（以降、「家族要因」とする）、③身近な人間関係の傾向（子どもを介した付き合いがあるか、悩みを相談する人がいるか、お金や物の貸し借りをする人がいるか、友達数）、④生活意識・自己意識（自己肯定感、文化資本得点）の４つの側面を基本に分析を進めた*3。

まず、子育て家庭の回答者全体の生活満足感と関わる要因について、分析した（表１）。

表１　子育て家庭の回答者（全体）の生活満足感の二項ロジスティック回帰分析

	B		Exp(B)
年齢	-.136	**	.873
共働きダミー	-.069		.933
世帯年収	.639	***	1.895
末子年齢	.069		1.072
親同居ダミー	-1.264	*	.283
父親満足ダミー	1.225	*	3.404
母親満足ダミー	1.776	**	5.906
両親から経済援助受けたダミー	.385		1.470
義理両親から経済援助受けたダミー	-.667		.513
両親に経済援助したダミー	.148		1.160
義理両親に経済援助したダミー	-.676		.509
子どもを介した付き合いの有無ダミー	.897		2.451
悩みを相談する人の有無ダミー	.818		2.266
お金や物の貸し借りをする人の有無ダミー	-.545		.580
親友の人数	-.060		.942
仲の良い友達の人数	.034		1.034
知り合い程度の友達の人数	-.013	*	.987
自己肯定感ダミー	1.083	**	2.954
文化資本得点	-.106		.899
定数	1.131		3.099
χ^2	0.000		
-2 対数尤度	145.949		
Cox-Snell R^2	0.219		
Nagelkerke R^2	0.335		
N	179		

①基本的な要因との関わりだが、「年齢」「世帯年収」との有意な関わりが確認できた。「年齢が高いこと」は負の効果、「世帯年収が高いこと」は正の効果が見られた。②家族要因については、「両親との同居」「父親との関係」「母親との関係」で有意な関わりが見られた。「両親との同居」には負の効果、「父親との関係に満足」と「母親との関係に満足」には正の効果が見られた。④自己意識要因については、「自己肯定感がある」ことには、「正の効果」が確認できた。

まとめると、「子育て家庭」の回答者については、「年齢が若いこと」、「世帯年収が高いこと」、「両親との別居」、「父親・母親との関係に満足していること」、「自己肯定感が高いこと」が「生活満足感」を高める要因となっていることが分かった。

３－２　子育て家庭の男性

今までの研究から、子育て家庭の回答者の生活意識については、性別によって、一定程度、異なる傾向が見られることが確認されている。ここからは、子育て家庭の「男性」「女性」の傾向を確認したい。

表２　子育て家庭の男性の生活満足感の二項ロジスティック回帰分析

	B		Exp(B)
年齢	-.144		.866
共働きダミー	.042		1.043
世帯年収	1.151	***	3.162
末子年齢	-.203		.816
親同居ダミー	-3.004	*	.050
父親満足ダミー	.398		1.489
両親から経済援助受けたダミー	.298		1.347
義理両親から経済援助受けたダミー	-2.776	**	.062
両親に経済援助したダミー	-.512		.599
義理両親に経済援助したダミー	1.459		4.301
悩みを相談する人の有無ダミー	2.428	**	11.337
お金や物の貸し借りをする人の有無ダミー	-2.094	*	.123
親友の人数	-.362	**	.696
仲の良い友達の人数	.177	***	1.194
知り合い程度の友達の人数	-.043	***	.958
自己肯定感ダミー	1.291		3.637
文化資本得点	-.117		.889
定数	4.648		104.356
χ^2	0.001		
-2 対数尤度	60.648		
Cox-Snell R^2	0.359		
Nagelkerke R^2	0.535		
N	90		

まず、子育て家庭の男性の生活満足感と関わる要因について、分析を進めた（表２）。分析の結果から有意な項目について確認する。まず、①基礎的な要因との関わりとして、「世帯年収」との関わりが見られた。「世帯年収」は正の効果が確認できた。次に、②家族要因については、「両親と同居するか」「義理の両親から経済的援助を受けたか」との関わりが見られた。この両方の項目で、有意な負の効果が確認できた。③身近な人間関係については、「（親しい人の中に）悩みを相談する人がいる」「仲の良い友達が多い」ことは正の効果、「（親しい人の中に）お金や物の貸し借りをする人がいる」は負の効果が確認できた。

まとめると、子育て家庭の男性の生活満足感にとって、「両親と同居すること」「義理の両親から経済的援助を受けること」「お金や物の貸し借りをする人がいること」は負の効果があり、「世帯年収が高いこと」「悩みを相談する人がいること」は正の効果が確認できた。

このように、基本的に、子育て家庭の男性の生活満足感との関わりでは、経済的な要因（世帯年収、経済的援助、お金や物の貸し借り）の影響が大きいことが確認できた。その一方で、悩みの相談相手がいることが生活満足感に正の効果があり、こうした人間関係づくりのサポートの重要性も確認することができた。

３－３　子育て家庭の女性

次に、「子育て家庭」の女性の生活満足感と関係する要因について、分析した（表３）。

まず、①基礎的な要因との関わりでは、男性同様に、「世帯年収が高いこと」には「正の効果」が確認できた。次に、②家族要因として、「父親との関係」に対して、「満足」であることは、「正の効果」が確認できた。次に、③身近な人間関係については、「子どもを介した人間関係の付き合いがある」こととの関係が確認できた。これは、「正の効果」が確認できた。④生活意識・自己意識については、「自

表３　子育て家庭の女性の生活満足感の二項ロジスティック回帰分析

	B		Exp(B)
年齢	-.129		.879
共働きダミー	.328		1.388
世帯年収	.906	**	2.476
末子年齢	.109		1.115
親同居ダミー	.418		1.519
父親満足ダミー	2.946	**	19.036
母親満足ダミー	-.664		.515
両親から経済援助受けたダミー	.731		2.076
義理両親から経済援助受けたダミー	.531		1.701
両親に経済援助したダミー	1.351		3.860
義理両親に経済援助したダミー	-2.216		.109
子どもを介した付き合いの有無ダミー	1.346	*	3.842
悩みを相談する人の有無ダミー	.770		2.160
お金や物の貸し借りをする人の有無ダミー	.878		2.406
自己肯定感ダミー	1.447	*	4.251
文化資本得点	-.122		.886
定数	-1.287		.276
χ^2	0.009		
-2 対数尤度	67.001		
Cox-Snell R^2	0.280		
Nagelkerke R^2	0.440		
N	98		

己肯定感がある」ことについて、「正の効果」が確認できた。

まとめると、子育て家庭の女性の生活満足感は、「世帯年収が高いこと」、「父親との関係に満足していること」、「子どもを介した人間関係の付き合いがあること」、「自己肯定感があること」について、正の効果が確認できた。

ここで注目したいことは、「子どもを介した人間関係の付き合いがあること」だ。「子育ての相互扶助的サポート」を考えると、互いの状況の理解や支援がしやすい人間関係づくりの支援が重要であると考えられる。先に触れた研究でも指摘したように、「子育て家庭」には、こうした相互サポートができる「子育てを中心としたコミュニティでのライフスタイル志向」が見られ、こうした「子育て仲間」作りの支援が特に重要となっている（二方 2017：51）。*4

４．分析結果の整理

「子育て家庭」の回答者の生活満足感について、二項ロジスティック回帰分析を通して、ここまでで確認できたことを整理する。

Ⅰ　子育て家庭全体の傾向

・世帯年収、父親との関係・母親との関係への満足、自己肯定感があることには、正の効果が確認できた。

・年齢（が高いこと）、両親との同居については、負の効果が確認できた。

Ⅱ　子育て家庭の男性の傾向

・世帯年収、悩みを相談する人がいること、仲良い友達の人数の多さには、正の効果が確認できた。
・両親との同居、義理の両親から経済的援助を受けた経験、お金や物の貸し借りをする人がいることには、負の効果が確認できた。

Ⅲ　子育て家庭の女性の傾向
・世帯年収、父親との関係に対する満足、子どもを介した付き合いがあること、自己肯定感があることには、正の効果が確認できた。

このように、「子育て家庭」の男女の生活満足感が「経済要因（世帯収入、経済的援助を受けることなど）」や「社会要因（家族や身近な人間関係など）」と関わることが改めて、確認できた。次節では、ここまでの分析をまとめて、支援の方向性を整理し、課題を論じる。

５．まとめと課題

ここでは、子育て家庭の「生活満足感」に関わる「経済要因」と「社会要因（家族関係、身近な人間関係）」について、3 つの論点からポイントを整理し、支援の方向性を論じる。

1 点目は、生活について論じるうえで、最も基礎となる経済的側面の重要性だ。他の要因との関連を整理した二項ロジスティック回帰分析においても、世帯年収は、生活満足感に、全体・男性・女性の全てで、有意な影響を与えていることが分かった。また、特に、子育て家庭の男性においては、「義理の両親から経済的援助を受けた経験」や「お金や物の貸し借りをする人がいること」が、「生活満足感」の低下に関わっていることが示唆された。つまり、それだけ経済的に困窮した状況に置かれていることが、「生活満足感」を低下させている。ここについては、「暮らし向き（経済的状況）が苦しい子育て家庭」の生活について分析する中でも、自身や社会の将来の展望への不安や社会制度・社会構造への不信感につながっていることが分かった(二方 2021)。支援の方向性としても、まず、子育て家庭が子育てに安心して向き合えるように、その生活の基盤を整える経済的支援が最も重要であると言えるだろう。

2 点目は、「家族関係（両親との関係）」と「生活満足感」の複雑な関係だ。分析からは、「両親との同居」との関わりや両親との関係への満足、両親（義理の両親）との経済的援助関係など、「両親との関係」が生活満足感に与える影響も大きいことが分かった。現代の家庭は、「夫婦家族制」のもとで、いわゆる「定位家族」（自分が生まれ育った家族）とは、一定の距離感の中で営まれる傾向が見られるが、その中でも、両親との関係が、生活満足感に影響を与えていることが分かった。

一般に、「両親との同居」の方が、日常生活の中で、様々なサポートが得やすいとも考えられるが、価値観やライフスタイルの違いなど、2 つの家族には、様々な相違点がある可能性もあり、それが「生活満足感」に影響を与えることも考えられる。そう考えると、「子育て家庭」の支援の方向性としては、両親とは、「同居によるサポート」という方向性だけではなく、場合によっては「近居」のように、「つかず離れず」の関係の中で、相互の精神的サポートも含めた関係性を築いていくという方向性も考えられるかもしれない（二方 2018：51)。[*5]

3 点目は、「身近な人間関係」によるインフォーマルなサポートの重要性だ。分析結果からは、「子どもを介した付き合いがあること」、「悩みを相談する人がいること」、友人数など「身近な人間関係」が充実し、そのサポートがあることが、「生活満足感」と関わっていることが分かった。こうした「子

どもを介した付き合い」や「悩みを相談する人がいること」は、「家庭生活重視」や「福祉社会志向」「将来展望の明るさ」と関わることが確認されている（二方 2018）。支援の方向性としては、子育て家庭が「身近な人間関係づくり（コミュニティづくり）」につながる機会を提供することが、重要であると言えるだろう。

そして、ここと関わるのが、「生活時間」の問題だ。「時間の貧困」は、「社会関係の貧困」とも関わる。この問題については、西本郁子の分析などをふまえて、「子育て家庭」にとって、「休日」を確保し、地域の活動に参加するなど視野を広げる時間にあてることの重要性について指摘した（二方 2015：28）。子育て家庭の生活の忙しさについても「生活時間」の分析を通して確認したが、支援の方向性としては、「身近な人間関係の維持・継続」につながるような「生活時間の確保」のための支援も重要だろう。

「経済要因」「社会要因」、そして「時間要因」という 3 つの要因は、相互に関連している（図１）。例えば、経済的な貧困は、社会関係の貧困とも直結するといわれる。また、社会関係の維持のためには、一定の「生活時間」を割くことも重要だ。そう考えると、この 3 つの要因について、それぞれ、フォーマル/インフォーマルの支援を検討していくことが重要であるということになる。

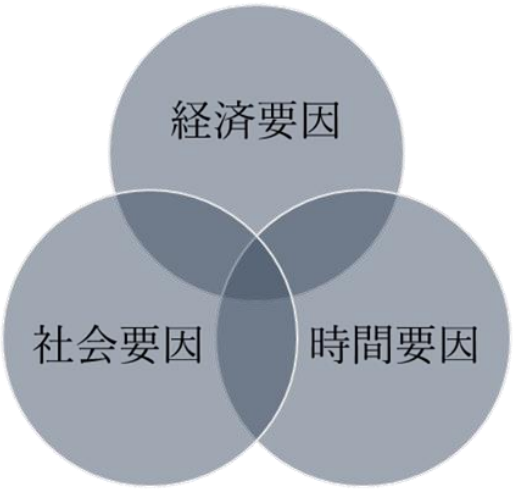

図 1　「生活満足感」の要因間の関係の整理

本稿の議論は試行的なものであり、課題がある。まず、この 3 要因と深く関わる大きな要素が「働き方」だ。この部分については、以前の分析でも、「生活満足感」との関わりについて指摘（二方 2020）したが、更に詳細な分析が必要だろう。また、「身近な人間関係」の充実に向けた支援について論じる際には、逆に、周囲からの「孤立感」が社会的な健康や生活満足感にどのような影響を与えているかについても、分析する必要がある*[6]。「子育ての中で感じること」など「子育て意識」との関わりについても課題だ。そして、以前に、身近な人間関係との関連で分析（二方 2018）した「家庭生活重視」や「福祉社会志向」のような生活意識・社会意識と生活満足感の関連についての分析も必要だろう。

経済的資源・時間的資源は有限であり、社会の中でその「分かち合い」を考えるためには、「社会の分断」をどう乗り越えるかという課題がある。そのためには、まず、「身近な人間関係」において、「分断」ではなく、「協力」ができるように、関係づくりをサポートする必要がある。「子育て家庭」に暮らす人々が、「今日一日、暮らしてきて、良かった」と生活に満足感を得られるためには、「分断」を乗り越えた物心両面のフォーマル/インフォーマルの支援が必要になっている。

注

１）本稿では、青少年研究会が、2012 年 11 月・12 月に、全国の 30 歳から 49 歳の男女 719 名を対象に訪問留め置き回収法と郵送回収法で行った調査（「都市住民の生活と意識に関する世代比較調査」）のデータを使用する。調査地は、東京都杉並区・神戸市灘区・東灘区である。有効回収率は、39.9%だった。（なお、この調査では、16～29 歳対象の調査と 30～49 歳対象の調査の 2 つが並行して実施されたが、本稿の分析は、後者の調査によるものである）

この調査は、以下の研究プロジェクトで実施されたものであり、青少年研究会 2015 にまとめられている。

平成 23 年度～平成 25 年度　文部科学省科学研究費補助金基盤研究(A)「流動化社会における都市青年文化の経時的実証研究－世代間/世代内比較分析を通じて－」（研究代表者　藤村正之）

（なお、この研究プロジェクトの問題関心を受け継ぐ以下の研究に研究分担者として参加している。令和元年度 ～令和 5 年度　文部科学省科学研究費補助金基盤研究(A)「現代若者の再帰的ライフスタイルの諸類型とその成立条件の解明」（研究代表者　浅野智彦））

２）特に、この社会生活上の「身近な人間関係」については、イギリスでは、2018 年に「孤独問題担当大臣」が任命されるなど、コミュニティなどにおいて、「身近な人間関係」とのつながりを作り出し、それによって、人々の「社会的健康」を増進する取り組みが注目されている。

３）本稿では、4 つの側面（①基礎的な要因、②自身の両親との関係、③身近な人間関係、④生活意識・自己意識）を基本に、それぞれの分析の中で、適宜変数を組み合わせて、分析を進めた。

本稿で使われている各変数は、次の通りである（それぞれの変数は、分析に合わせて、適宜、選択肢を足し合わせるなどの整理をしている）。なお、分析は、二項ロジスティック回帰分析である。検定結果は、＊は 10%、＊＊は 5%、＊＊＊は１%の有意水準であることを示す。

「世帯種別」…F2「現在、結婚していますか」と F4「あなたにお子様はいらっしゃいますか。いる場合は人数と一番下のお子さんの年齢をご記入ください」を使い、「結婚していて、子どもが 0～18 歳」（374 人）あるいは「離婚していて、子どもが 0～18 歳」（16 人）という回答者を「子育て家庭」（390 人）とした。

「生活満足感」…Q41a「現在の生活に満足している」に対する「そうだ」と「どちらかといえばそうだ」を集計。

「年齢」…F1「あなたの性別と年齢をご記入ください」の回答を集計。

「夫婦共働き」…F8「あなたは現在、お仕事はしていますか」と F9「配偶者の方はお仕事をなさっていますか」という質問から集計した。（F8 については「１．有職（パート・アルバイトを含む）」、F9 については「１．フルタイムで働いている」「２．パート・アルバイト」を有職として集計）

「世帯収入」…F11「お宅の世帯年収（税込み）は、次のうちどれにあたりますか」という質問で、「1. 200 万円未満」「2. 200 万円以上～400 万円未満」「3. 400 万円以上～600 万円未満」「4. 600 万円以上～800 万円未満」「5. 800 万円以上～1000 万円未満」「6. 1000 万円以上～1200 万円未満」「7. 1200 万円以上～1400 万円未満」「8. 1400 万円以上」の選択肢から回答したものを集計。

「末子年齢」…F4「お子さんはいますか。いる場合は人数と一番下のお子さんの年齢をご記入ください」という質問で、「一番下のお子さんの年齢」を集計。

「親同居」…F5「現在、親と同居していますか」を集計。

「父親満足・母親満足」…Q36「あなたは、あなたのご自身の父親、母親との現在の関係に満足していますか」という質問において、「父親との関係」「母親との関係」に「満足している」とした回答を集計。

「両親との経済的援助関係」…Q38「この 1 年間に、ご自身の両親または義理の両親から金銭援助（こづかい、仕送り、贈与など）を受けましたか」、Q39「この 1 年間に、ご自身の両親または義理の両親に対して金銭援助（こづかい、仕送り、贈与など）をしましたか」を分析した。選択肢は、Q38 は「1. 受けた（年間 30 万以上）」「2. 受けた（年間 30 万円未満）」「3. 受けなかった」「4. いない」、Q39 は「1. した（年間 30 万以上）」「2. した（年間 30 万円未満）」「3. しなかった」「4. いない」であり、それぞれ、「4. いない」は集計から外して分析した。

「子どもを介した付き合いの有無」…Q30「同居しているご家族以外で、あなたにとって親しい人を、あなたにとって親しい順に最大 3

人まで思い浮かべてください」という質問で、「d) その人と知り合ったのはどこですか」の「6. 子どもを介したつきあいで」とした回答を集計。

「悩みを相談する人の有無」「お金や物の貸し借りをする人の有無」…Q30「同居しているご家族以外で、あなたにとって親しい人を、あなたにとって親しい順に最大3人まで思い浮かべてください」という質問で、「g) その人とは、どのような関係ですか」で「3．お金や物の貸し借りをする」「4．悩みを相談する」とした回答を集計。

「友人数」…Q31「あなたとつきあいのある友人を、親しさの度合いによって「親友」「仲のよい友人」「知り合い程度の友人」に分けるとすると、それらはそれぞれ何人いますか」という質問において、「a)親友（恋人は除く）」（平均3.09人）と「b)仲のよい友人（親友を除く）」（平均10.82人）の回答を集計。

「自己肯定感」…Q20「あなたは今の自分が好きですか。それとも嫌いですか」という質問の「大好き」「おおむね好き」との回答を「自己肯定」として集計。

「文化資本得点」…F15「あなたは、子どもの頃に次のような経験をしたことがありますか」という質問の中の「a) 子どもの頃、家族の誰かがあなたに本を読んでくれた」「b)子どもの頃、家でクラシック音楽のレコードを聞いたり、家族とクラシック音楽のコンサートに行った」「c)子どもの頃、家族につれられて美術展や博物館に行った」という項目の「1よくあった」「2ときどきあった」「3あまりなかった」「4なかった」という選択肢を足し合わせて、得点を逆転して集計した。

「孤立感」…Q25「あなたは、ふだんの生活の中で、次にあげるようなことをしたり感じたりすることがどれくらいありますか」という質問の中の「b)ひとりでいると孤独を感じる」の回答（「よくある」「ときどきある」「あまりない」「まったくない」を集計）

4）ここで見たのは、主に、「世代内」の子育て支援だが、子育て支援には、「世代内」「世代間」の両面の支援が重要となっている。例えば、地方自治体の発行する「孫育てブック」のように、「世代間」の相互理解を深めて、子育て支援を進めようとする取り組みがある。

5）このデータの調査対象は、大都市部であり、住宅事情なども関係している可能性がある。こうした「暮らし方」との関わりについては、更に詳細な分析が必要である。

6）子育て家庭の「孤立感」と「生活満足感」の関わりについては、相関分析の結果、孤立感を感じる人ほど、生活満足感が低い傾向が有意に見られた。ここについては、更に詳細な分析が必要である。

文献

二方龍紀, 2014,「子育て家庭の生活と支援―生活時間調査からの考察―」『清泉女学院短期大学研究紀要』32:11-21.

二方龍紀, 2015,「子育て家庭の生活時間―平日と休日の比較を通して―」『清泉女学院短期大学研究紀要』33:19-31.

二方龍紀, 2016,「子育て家庭の意識と行動―中年調査からの考察―」『清泉女学院短期大学研究紀要』34:43-52.

二方龍紀, 2017,「子育て家庭における生活意識・行動の差異―世帯収入・末子年齢別による分析―」『清泉女学院短期大学研究紀要』35:50-59.

二方龍紀, 2018,「子育て家庭の生活と身近な人間関係―家族・友人関係による分析―」『清泉女学院短期大学研究紀要』36:43-54.

二方龍紀, 2019,「子育て家庭のライフスタイル―情報行動・社会意識の分析から―」『清泉女学院短期大学研究紀要』37:31-41.

二方龍紀, 2020,「子育て家庭の生活意識―世代・働き方による比較―」『清泉女学院短期大学研究紀要』38:64-72.

二方龍紀, 2021,「子育て家庭の生活意識・社会意識―暮らし向きからの分析―」『清泉女学院短期大学

紀要』39:21-30.
青少年研究会, 2015,『平成 23 年度～平成 25 年度　文部科学省科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書「流動化社会における都市青年文化の経時的実証研究－世代間/世代内比較分析を通じて－」』上智大学総合人間科学部社会学科.

SUMMARY

This paper aims to analyze the factors related to the sense of life satisfaction among child-rearing households from the aspects of various attributes and family and close relationships. It was confirmed that economic factors have a significant effect on the sense of life satisfaction—a tendency which was especially pronounced among men in child-rearing households. In addition, it was confirmed that having someone to consult with and having human relationships related to child-rearing positively affect the sense of life satisfaction.

Keywords: child-rearing family, sense of life satisfaction, family relationships, close relationships